WEP

VOL. 134
ウエップ
俳句通信

俳句通信

特別作品20句　松岡隆子「帰心」

特集〈"近ごろいいと思った句"について〉

青山　丈　「同人誌という仲間の中で」
池田澄子　「驚きと共感」
今井　聖　「画一的素材が類型的内容を導く」
大石雄鬼　「幸福なおしり――意識する生と死」
角谷昌子　「懸命な刻の青」
岸本尚毅　「黒田杏子さんの雛の句」
対中いずみ　「若者の句・シニアの句」
高山れおな　「烏賊の目の周りで躊躇なく死ねよ、かしら」
寺澤一雄　「俳句と読みの隔たり」
堀田季何　「近ごろ、ごろごろと」
柳生正名　「韻文精神と俳句」

【競詠16句】
井越芳子「柱松柴燈神事・前夜」
浦川聡子「遠き日」
田中亜美「円舞」

作品／藤田良雨・古澤宜友・朝妻　力・
西村和子・矢野景一・渡辺誠一郎・井上弘美・
瀧澤和治・松林朝香・山元志津香・米山光郎・
村上喜代子・高岡麗子・渡井恵子・田口紅子・
江見悦子・岡田耕治・鈴木章和・奈良比佐子・
鈴木すぐる・長沼利恵子・桑田和子　ほか

鳥取の六月

写真／樋口一成

たいさんぼくのはな

泰山木の花

北米原産の常緑高木。高さは20㍍を超すものも。
日本へは明治時代に入ってきて、公園や庭の木として親しまれている。
5月から7月ごろ白い大きな花を咲かせる。花の直径は15～30㌢ほど。
9枚の盃型の花被片を空に向けて重ねる。馥郁たる甘い香りがする。

イラスト　田中丸葉子

香水（こうすい）

香水やまぬがれがたく老けたまひ　後藤夜半

香水や衿掻きあはす癖のまた　稲垣きくの

香水やをりをりひびく仏蘭西語　清崎敏郎

夏の終わりのころパリでは肌寒い日が続いていた。ある日、墓地を訪ね歩いたあと、モンパルナスのカフェに入った。席に着くとすぐに、強い香水のにおいに包まれた。

そのにおいはすぐ隣の席のひとりの男からやってきていた。まっ赤なセーターを着ていてすごく色白な男だ。俳優・ジャン・マレーに似ている。

そして香水の強いにおいはかなり官能的なものだった。

――彼は同性愛なの。赤いセーターを着ているのは、だいたいそうなの。

パリに長く暮らしている女性画家がそう教えてくれた。

何日かあと帰国の便に乗るわたしはドゴール空港の売店で香水をひと瓶買った。カフェで出会った男の香水と同じにおいのもので、それは麝香のにおいだと思った。

その香水瓶を新宿のなじみのバーのママに贈ったが、ママがそれをつけたことはなかったようだ。いついってもママから麝香のにおいはしてこなかった。

30年前のことである。

（大崎紀夫）

特別作品 20句

帰心

松岡隆子

みづうみの風を斜めに初燕

漣の夕日を羽撃ち春の鴨

春草を分けて一水耀へり

裏木戸の一歩に著莪の花明り

母のこゑ祖母のこゑする蓬籠

特集

〈〝近ごろいいと思った句〟について〉

最近の俳句でいいと思った句、面白いと思った句をいくつか取り上げて、それらについて感想なりをお書きいただきました。
最後に自句の（少し）気にいった句1～3句についてお書きいただきました。

青山　丈　　角谷昌子　　寺澤一雄
池田澄子　　岸本尚毅　　堀田季何
今井　聖　　対中いずみ　　柳生正名
大石雄鬼　　高山れおな

同人誌という仲間の中で

青山　丈

本誌から〈〝近ごろいいと思った〟句、面白いと思った句について書くように〉の依頼があったので、この時期注目されている俳句同人誌メンバーの作品を紹介したい。

季刊の俳句同人誌「棒」がこの四月で第十九号を迎える。創刊号の巻頭論文「山本健吉と『棒』」を柳生正名氏に飾って頂いて、八名でのスタートであった。

俳句欄をもつ主要新聞社、俳句総合誌各社、各俳句協会、俳句関係資料館、俳句結社、評論家、俳人、そしてメンバーの各人が贈呈する分も含めて結構な発行部数を四季にわたって一度も欠かすこともなく運営されこの五月の十九号を刊行し、会員も二十名を越す同人誌として活動出来るのも、贈呈先の各位からのお励ましや、お仲間の献身的なご尽力あってのことと感謝の念を深くする。

この間、コロナ疫禍もあって、今日まで全員一同が一同に会したことが無いので、この稿を幸いに便乗させて頂き、十八号よりメンバーの「いいと思った句」を僭越ですが紹介させて頂く。

狐火を見にゆき帰れなくなりぬ　田口紅子

「見て帰りけり」だったら紅子さんの句でなくなる。

小諸なる虚子庵訪へり紫苑長け　中村幸子

木戸を潜ると紫苑の中に虚子の句碑。藤村気分。

町内を回って来る赤い羽　新井義典

新井さんは難しい句を作らない。十六句の最たる句。

ここらからあそこあたりがそぞろ寒　西池冬扇

冬扇さんの句は体から羽が生えたように跳んでいる。

逆向きの列車の席や厚着して　西池みどり

このデリケートな感覚がみどりさんの俳の根元。

教室に入るでもなく赤とんぼ　萩野明子

「見ててごらん」と声を掛けられたような句だ。

ひよんの笛つまらなさうな音が出て　平栗瑞枝

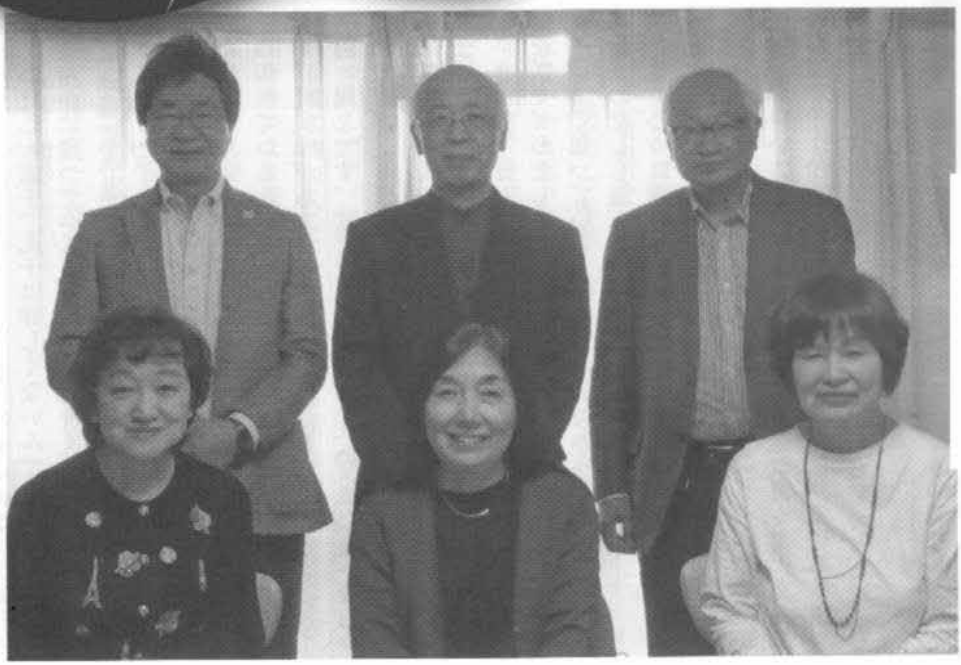
つまらなそうでつまる句にしてしまう瑞枝さん。

恋の唄独りの夜長聴くとなく　前澤宏光

坪内稔典さんが若若しい句を作れと老人達にはっぱをかけている。「聴くとなく」は実に絶妙。

行く人の足ばかり見て日向ぼこ　水野晶子

超結社句会／新12番勝負



前列右から藤本氏、遠藤氏、藤田氏
後列右から星野氏、鈴木氏、小島氏

ゲスト　遠藤由樹子・小島　健
鈴木五鈴・藤田直子
ホスト　星野高士・藤本美和子

編集部　本日の参加者は「藍生」会員の遠藤由樹子さん、「河」同人の小島健さん、「草の花」副主宰の鈴木五鈴さん、「秋麗」主宰の藤田直子さん。5句投句、7句選です。忌憚のない意見交換をお願いします。

高士　では始めます。3点句が多いですね。8句あります。

緑蔭や老子は孔子論しをる　由直美

女性3人が採っています。

直子　困りましたね。老子も孔子も全然知らないの。

美和子　わたしもそう。

直子　そうなんだろうな、と思わせる季語が「緑蔭」なんだと思うんですね。飯島晴子さんの句に「孔子一行衣服で赭い梨を拭き」をちょっと思い出した感じの句でした。時代をワープして、すごくいい句だと思いました。

美和子　わたしも、よく分からないんだけど、この句を見て水墨画の世界のような感じがしたんです。そこに「緑蔭」の緑がとても鮮やかに描き出されていて、想像の世界なんだけれども、さもありなん、という感じで頂きました。